第４回　新伊方町誌編さん委員会

【日時】　令和５年７月６日　13:30～15:00

【場所】　伊方町役場　６階大会議室

【次第】　１　開会あいさつ　濱松委員長

　 　２　議事

1. 新伊方町誌編さん構成について
2. 新伊方町誌執筆要領について
3. 今後のスケジュールについて

　３　その他

【構成員】　**委員長**　　濱松委員長

 　　**副委員長**　谷村栄樹

 　　**委員**

 　　　中川未来（愛媛大学准教授）

井村桂子（元伊方町役場職員・伊方地域）

井上利彦（元伊方町役場職員・瀬戸地域）

宇藤　司（元伊方町役場職員・三崎地域）

高嶋賢二（佐田岬半島ミュージアム副館長）

稲田美樹（図書館司書）

**町誌編さん業務受託者**

岡田印刷株式会社

 　　**事務局**藤川輝之（総合政策課課長補佐）

 　 　松下洋二（総合政策課 係長）

 　　 林　優里（総合政策課 主事）

 　　 中元真理（総合政策課 主事）

議事内容

１　開会あいさつ

（委員長）

皆さん、こんにちは。第4回の新伊方町誌編さん委員会ということで、お忙しい中、ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

第3回の委員会では、この町誌編さん業務にかかりますプロポーザルの審査会、評価委員会の結果、岡田印刷株式会社さんに決定をいたしまして、本日は岡田印刷株式会社さんのほうもご出席をいただき、この委員会を行うということにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

新町誌編纂、今回からがスタートラインということで、委員の皆様には何かとお世話になっております。という本日の案件は三件を予定しております。慎重審議となりますよう、お願いいたしまして、簡単ではございますが挨拶とさせていただきます。

２　議事（１）新伊方町誌編さん構成について

「２（１）新伊方町誌編さん構成について」岡田印刷株式会社より説明

（委員）

前回のプロポーザルで見せていただいた全体構成案と、今回でどこに変更が加わったのか教えていただけませんか。

（岡田印刷株式会社）

基本的には前回と同じ内容で、あとは中身の詳細を入れさせていただいております。より詳しい内容を加えさせていただいております。

（委員）

前回の9ページの第2編のところが、現在の伊方ができるまでっていう今回お配りいただいた第2編第1章のところに集約される感じで、いろいろ中身を出していったら結構変更点が変わっていったなっていう感じで。

（岡田印刷株式会社）

そうです。

（委員）

前回の委員会の時に、委員長からだったと思いますが、今回出していただいたコンセプトの大事典、っていう感じが構成や全体の表現としてあったらいいなというご意見があったかと思います。

で、今後これを詰めていくことになると思うのですが、委員の皆さんの共通認識としてあるのは、やっぱり、作るからには周囲の町の方々や、周囲の市町の方に手に取っていただけるものにしたい、ということで、デザインとかは技術的なところで何ともなるのですけれども、むしろ重要なのは、手に取ろうという意欲を掻き立てるような内容だと思うんですね。これは皆さんと一緒に考えていかないといけないというものなんですけれども、現在の構成案は、個人としてはきっちりとしっかりしているけれども、一方で若い町民の方とか、高校生とか、手に取るかなというのがちょっと不安です。

で、最初にちょっと思っていたことを言わせていただきたいんですけれども、やっぱり全体として、今回何を打ち出したいのか、っていうコンセプトを出す必要があると思うんですよ。「選ばれる伊方町」ということで、合併後の人口減とか、いろんな厳しい状況にある中でも選ばれたい、そのために情報を発信するんだ、過去を振り返って未来につないでいくんだ、というのが1番大きな枠組みだと思います。

で、そういった「選ばれる伊方町」っていうのの特徴や売り、押しですね、をどのようにして、例えば全体の構成としてストーリーとして示せるか、史実は当然史実として書くべきですけれども、手に取っていただくためには、私たちのほうがこういう伊方町なんですよ、ってストーリーを強く打ち出さないと、少なからぬ税を投入して作っても、読まれなかった、というのは意味がないと思うんですよね。

例えば、前々回かな、内子町さんの話が出ましたけれど、あそこは結構尖ってるんですよね。うちこ時草子とか、変わったタイトルとかで、かなりビジュアル重視のところを打ち出されて、それに沿った内容を作られていたかと思います。

この間、この委員会が終わった後に博物館を内覧させていただきました。そこで出ているコンセプトとして感じたのは、伊方、佐田岬半島っていうのは、ある意味辺境でありながら中心なんだ、ある意味色んな意味で従属性を帯びているかつ刺激的な存在なんだ、さらには今の交通体系から見れば孤立しているかもしれないけれども、昔を振り返ればその交通性、有用性っていうのが強くあったんだと。

例えば船とか杜氏とかですね。言葉はちょっとあれですけど、閉鎖性って言ったらいかんけれど、どうしてもそういう側面も一方ではあるんだけども、いろんなところに人がどんどん出て行って、新しいものを持ち帰って、という開放性あった。

過去っていうのは裏返しの未来ですから、これまでの20年ないし、合併以来のさらにはそれ以前を振り返ることで、どういうこれから、打ち出していきたい、伝えたいメッセージ、っていうのをチョイスして、こういう形で編んで、未来へ投射していく、っていうところを、今は大きく振りかぶってものを言ってますが、それくらい考えないと、面白くないじゃないですか。せっかくやるんだったら、行政の枠内、中立性の枠内、予算の枠内で制約がありますけれどやりたいなあとは思っています。

何とかこう、そういうのを構成にうまいこと、骨組みはこれでいいと思うんですよ。落とし込んでいけるかなあと。

（岡田印刷株式会社）

先生の言われることはすごい理解できるんですけれども、町誌自体の編さんというものがどうしても固いイメージ、史実関係というのは崩せないというのがありますので、一応今の構成案としては、そういうものにさせていただいてます。逆に、御意見があったら吸い上げて、検討したいと考えてます。

（委員長）

メリハリがあってもいいと思います。ここは手厚く、ここはさらっとっていう風に。

（岡田印刷株式会社）

伊方町ができるまでの流れをできるだけ掘り下げて、っていうのも考えてはいるんですけれども、それだけの資料関係がそれまでに揃えられるかな、という懸念はあります。史実関係につきましては、掘り下げていくと、ページ数の制約の中では納まりきらない、ということで今回外させていただいて、集約した形での構成案にさせていただいております。

（委員）

第1編で伊方町の概要で、自然環境や人口という流れがあって、考古学がでてくるのが唐突だなって印象がありまして、考古学の内容の案のほうに遺跡発掘調査から見た伊方町というのがあるんですけれども、伊方町、発掘調査の実績というものがないんですね。今までは工事現場から無事発見できたものを集めているだけで、考古だけで語るのは難しいんじゃないかというのと、考古だから古代中心のものだとおもうんですけれど、ここだけ急に取り出して、そこから急に次に行財政というので、この割り振った22ページの中で、古代から中世、近世、近代っていのを多少とも、触れておいたほうがバランスがいいのかな、とは思います。あと、第6編の第3章の社会教育のところ、いろいろ書いてくださってますけれど、博物館のことも加えていただければと、というのとさっきも言われてましたが、コンセプトに沿うようにっていうことですね。

(岡田印刷株式会社)

考古学のほうはですね、石貫先生のほうとの詳細な打ち合わせはまだでですね、一応お願いします、といった形で、内容のほうはこちらのほうとしても専門外ですので、先生にお任せするしかないとは考えていたんですけれども、お話を伺って、詳細を詰めていきたいと考えております。

（委員）

岡田印刷株式会社さんの話を聞いて、「選ばれる伊方町」というのが何を意味するのか分からないんですけれども、このコンセプトを、どういうところを入れたらいいのかな、という案っていうのはあるんですか。

（事務局）

今回選ばれる伊方町というところで、先ほどからも、中川さんからも、大事典とかということで、若者に読んでもらえるような内容というところで先ほどからの出てはおるんですけれども、それにつながる部分もありまして、単純な町誌、という事実だけを書いていくっていう町誌ではなく、そういったところで、いろんな人に読んでもらうような工夫を凝らして、いろんな人に手にとってもらう、そして、読んでもらう、そして、そこから、ただ伊方町を好きになってもらう、そういったところを目指して、ただ単に事実だけを書く町誌でなく、そういったところで親しまれる、町民からも、町外の人からも親しまれる町誌にしたいという思いでそういったコンセプトにさせていただいております。

（委員）

想定している項目ってあるんですか。

（事務局）

想定している項目というのは今のところ、特段用意はしないんですけども、事務局側としましては、伊方町といえば、原子力の町というところで、原子力発電所を有しております。で、ここ20年、原子力政策っていうのは日本全国でいろんな転換期を迎えているというところで、この原子力発電所のところをですね、深く広くとってですね、そこに焦点を当てるっていうのは、一つ、私の中では考えておりました。

そういったところで、伊方町で特色であるそのところをしっかり書いていくところで、未来の人に見てもらうっていうとこも含め、後世に伝えるっていうところは、事務局として、今のところを考えてはおりますけども、どういった方法でちょっと手に取ってもらえる内容になるのかっていうところまではちょっと、考えが至っておりません。

（委員）

先ほど岡田印刷株式会社さんの説明での今後町誌編さん作業を進めていく中で、町としてかかわっていく必要があるんですが、町としての組織を作って町としての方針、「選ばれる伊方町」のためにどういった内容を盛り込んでいくか、っていうことを役場のほうで検討しながら岡田印刷株式会社さんとすり合わせしながら進めていくという感じですか。

（事務局）

今のところ、新たな組織をつくるというとこまでは計画はしておりませんけども、各課の課長さんが協力員として、この編さん委員会に加わっていただいておる状況です。その中で、こういった状況を各課に共有しつつ、各課からこれは載せてくれとか、これは載せなくていいよ、とかそういったところも各課としての思いというところもあると思います。

そういったところ、意見を課内で集約しまして、それで事務局側から、岡田印刷株式会社さんといろいろと打合せなりして、すり合わせをしていけたらなと、今のところ思っております。

（委員）

電気事業の、原子力発電と風力発電がありますけれども、今再生利用エネルギーの時代ということで、太陽光とかいろいろありますけれど、再生利用エネルギーを入れたほうがいいんじゃないですかね。

（岡田印刷株式会社）

こういうのにつきましてもですね、各課から、そういうのを活用している状況がそのあたりの資料が提供されれば先生方に依頼をして書けますけれども。

（事務局）

公共施設のほうでいろいろつけているのと、そういったところは情報提供出来ます。あと、町のほうでこの再生可能エネルギーの分で補助金を出す、一般家庭で、太陽光と、これは蓄電池のほうなんですけど、蓄電池をつけたところには、補助金を出しているという制度がありまして、そういった部分の記載はできるのかなと今聞いて思いはしました。

（委員）

前回の委員会の方々がやっぱり、10年のあゆみ、見させていただいたんですけれども、この時の編さん委員会の方々がすごい工夫されているのがよくわかって、いわゆる旧町誌みたいなのではないんですよね、当時の方々の作文とか入っていて、面白いなあと思いました。で、詳しいことっていうのは、過去の町誌の関係者の方々が書いてるわけだから、確かにざっくり書く必要はないけれども、ここが売りですよっていうのを引き出していくときに過去のことも言及しなければいけないと思うんですよね。結構いろんなところから人が来てたんだよ、人が出て行って、そんな中で日本と、世界とつながっていたんだよっていう風に。

一方で、岡田印刷株式会社さんが作ってくださった構成案もしっかりしてるんですよ、盛り込まなきゃいけないところは全部盛り込まれてると思いました。さっきメリハリっていうことを言いましたが、例えば、伊方町の行政っていうのはこういうのを頑張っているんだとか、こういうのが売りなんだ、とかそれぞれの活動の中で頑張っていることを強く打ち出すという形で、柔軟に構成をメリハリつけて、活かしていけないかな、と思います。若い人とか、定年退職してから戻ってきたい人とか、住み続けたい方々に選ばれる、その理由を示すことにつながるんじゃないかなあとは思います。新伊方町誌っていうのは、事業名称であって、これは町側に確認したいんですけれど、この名称は動かせないんですか。

（事務局）

第1回のところで、仮称というところは消さしてはいただいておるんですけども、まだ流動的に変更は可能であると考えております。

（委員）

事業名称として、これを絶対に入れないといけない、ということであれば、例えば正式名称はこうだけれども、愛称としてはこういうのがある、というのもありますよね。そういう位置づけでキャッチーないいタイトルをね、これは最後まで動かせるところですから。皆さんで知恵を振り絞って、考えていけばいいですかね。

どうしても、20年だけで現在があるわけではないし、町の財産っていうのはこの20年のものだけではないっていうので、ある程度のスパンをとって、過去を振り返らなければならない、かつ、広報というのは例えば広報というのは、これが何とか、普通でしたら広報的な何かが売りになるんですけれども、ここは果たして本当にそうなのか、もっと別のところに注力するべきなのではないかなあと、これは感想なんですけれども。

（委員長）

今、町のほうとしてはですね、人口減少対策が喫緊の課題なんですけれども、人口減少の抑制をしていくために、町の取り組みとしてやっているのが、一つ目が健康長寿のまち、二つ目が日本有数の子育て支援のまち、三番目がデジタルライフのまち、こういう風なところで取り組んでいます。伊方町の政策推進のコンセプトは、小さな町のSDGsです。

魅力発信のコンセプトは、ワンダービューと柑橘と魚のまち、そして、ICTを活用した魅力の創出と情報発信をしております。ご案内のほうに、風力発電と原子力発電はもちろんですけど、風力、原子力と共生をしてきたまち、ということで、深いエネルギーとの欠かせない要素もありますね。そういう伊方町を考えて、どこを充実させていったらいいのか、そこらへんは考えておく必要があるかな、そして、コラムとか、特集というものを、いわゆる集めてきたら伊方町の魅力が詰まっているものをそういう風なものも考えられるかなと今思っています。行財政とか、そういうのはどこの執筆者も一緒なんですよね。さっきのコンセプトを踏まえてどこのボリュームを増やしていくのか、そういう所を考えていく必要があるんじゃないかと感じました。

（委員）

今委員長が言われたことから、私が思ったことなんですけれども、例えば愛媛大学の社会共創学部というものがあります。地域に大学の知恵を還元して、地域の課題をともに解決していこうという感じで作られているんですけれども、私の知っているある教授が取り組んでいるのが、ネガティブな言い方なんですけれども、地域の終活をお手伝いしている先生もいらっしゃるんですよね。要するにあるところは近い将来、消滅を食い止められないのであれば、せめてそこに人が暮らしていたことを後世に何らかの形で伝えられるように今のうちに手を打っておこうといったことをやってらっしゃいます。ですから、選ばれるというより、選択、集中というものはあまり好きではないんですけれども、おそらく町の側もそれは足りてると思います。

だから、町誌の役割というのは、人口減少を食い止めながらも、一方では、現実として、少なくなっちゃってるところはあるわけですから、かつて例えば2000年代には、ここにタバコ屋さんがあったんだ、ここに床屋さんがあったんだ、そういった記録性ですよね、それはおそらく今にしかできない、ことではあるんだと思います。色んな所を向いてたら話はまとまるものもまとまりませんから、これはあくまで私の感想ではありますが。

（委員長）

確かに人が暮らしていたそういう証を残していくのもありますね。今確かに55の集落がありますが、10人未満の集落も多いんです。100人未満の集落が多いんです。100人以上いる集落のほうが今少ないんですよ。

（委員）

先ほどのご指摘と今の話を流れで言いますと、今、大急ぎで作っている博物館の常設展示なんですが、民俗行事なんかはできるだけ、分かっている範囲のすべての写真を、例えば小島とか、すごく世帯が少なくなっている集落も、ここに俺たちの集落が載ってるとわかるとやっぱり見てみたいとか言うし、だれか人が来た時にこれ見てとか言いたいと思う、いろんな地域にそれぞれゆかりがあって、地域に住んでるという応援というかですね、ここちゃんとやってきで堂々と生きていたっていうことを誇れるような展示にしたいと思ってやってました。

選ばれるっていうコンセプトの中で、どこに行ってみたいとか、うちの地域のことが載ってるとか地元の人にも響くことであるし、外の人にも、どんな人が暮らしているんだろうってなると思うので、そういう感じで、第2編から第6編までは、行政の側の記述なんですけれど、第7編からは地元の人の顔が見えやすいところでもあると思うので、そういう見え方、ありかなって思いました。あと、第5編の第5章、鉱業なんですけれども、ここ20年は動きがないので、ここは薄くてもいいかもしれないです。

（岡田印刷株式会社）

前に考えていたのがですね、各地区ごとの写真を撮ろうと考えていたんですが、それを入れ込んでいくと、想定ページ数の関係から難しいなとなりまして。

（委員長）

構成については大事なところなので、岡田印刷株式会社さん、これまでの意見も踏まえて何かございますか。

（岡田印刷株式会社）

基本は町誌という形の中で、基本ベースについては、こちらの内容でさせていただけたらと思います。コラムにつきましては、ご意見をいただいた中で、そちらを取材させていただいてその分をまとめてコラムにするといった形でと考えております。

（委員）

もう少し柔軟になってもいいんじゃないですかね。町誌っていうのは、一定のフォーマットがあるわけではなくて、おそらく行政の先例を重視する考えから何となくそのような形が続いているだけなんですよね。

例えば今だったら、インターネットで、まずはホームページでいろんな情報を活用している、箱物としては、博物館までも作られて、視覚、聴覚のものでとして、さらにお金をかけて印刷物という形で作るんだったらその特徴は何なのか、記録性ですよね。記録と保存。するとほかには何かないのかなあ、といった感じで。構成案は当然設計図ですからこれはこれでいいんです。委員長が言われたように、行財政っていうのはそんなに変わりはしないし、いい方は悪いかもしれませんが、歴代の町長さんとか議長さんとか、顔写真が並んでいても面白くないんですよ。

それよりかは、第2編のところを使って、委員長が言われた、伊方町のコンセプトを持ってきてうまいことメリハリつけて、構成要素をどう示すかは別問題なんですけれど、それぞれの売りのところをしっかり出していければありがたいのかなあ、と。こういうのもやっぱり事務局とのすり合わせが大事ですよね。

（委員長）

私も中川先生が言われたように、これはこれでいいんですよ。あとはもうメリハリだという風に思います。コンセプトに合わせて、どのようにメリハリをつけていくのか。行財政なんかはこれは町サイドのものであるから書けますよね。今やってることなんかの資料を提出させていただければいいんですよね。

（岡田印刷株式会社）

そうです。資料を提供いただいて、こちらで書きます。事務局のほうとしっかりその辺打ち合わせをさせていただけたらと思います。

（事務局）

そういったところはですね、総合計画とは別で事務局側から資料提供をさせていただいて、書いていただくようになると思います。

（委員）

そういった形になりますと、例えば健康長寿を目指して、こういうことをやっている、やってきた、これが足りない、とか、広報公聴ではこういうことをやって、議会ではこういうことをやって、財政ではこういう風に手当てをつける、デジタルライフではっていう風にするのも一つのメリハリになるのかなと思いました。

ですから、町の発展っていうのを目指して、2編、3編、4編、5編の内容にかかわるようにするのも、今委員長が言われた3つの大きな目標、そして小さなまちのSDGsに向けて動いていけたら。町のやっていることに介入するような構成にするっていうのはできるんじゃないかな、とは。それくらいやらないと面白くない。

（委員長）

広報一つ取ってみても、広報紙、ホームページ、防災無線は当たり前のことなんですよ。今伊方町、タウンプロモーションやってます。そういう風な取り組みを今現在進行形のものもしっかり情報提供しますので。

（委員）

さっきの各地域の人たちの顔がっていうことなんですけれど、第7編の第3章の1ページと、第8編の22ページ、第9編の22ページこれ全部足して、大体50ページくらい、地区の人たちとともにっていうの、どうですか。55集落の軌跡みたいな感じで。ゆかりある人物もそこで紹介して。

（委員長）

そうですね、そのような工夫ですね。項目はいいんですよ。あとはどういう見せ方をしていくのか。他にご質問ございませんか。それでは、一番目の構成一覧について終了させていただきます。今出た意見について、整理していただけたらと思います。よろしくお願いします。

（２）新伊方町誌執筆要領について

「新伊方町誌執筆要領について」岡田印刷株式会社より説明。

（委員長）

はい。それでは執筆要領についてご質問はありますでしょうか。

（委員）

これは、委員会の方針的なものですか、それとも業者さんのほうのですか。

（岡田印刷株式会社）

業者のものになります。

（委員）

もしこの記述が差別的ではないか、配慮が足りていないとかそういうことを言われた際に、ちゃんとこの要領に沿って配慮してやってますよ、という感じのことを言えますから。

（委員長）

字の大きさはこれ10.5ポイントですよね。皆さんどうですか。

（委員）

結構字の行間あけてくださっているから見やすいですよね。

（３）今後のスケジュールについて

「今後のスケジュールについて」岡田印刷株式会社より説明。

（委員）

これ、技術的に逆算して、予定は動かせないんですかね。これだけタイトですから、やっぱり最初の全体像というか、何をどうするか、っていうのははっきりさせておかないと執筆される方も困りますよね。何書けばいいのかって。

（委員）

このスケジュール7月の、担当部署確認って役場の担当ですよね。7月に内容確認ってイメージできないんですよね。

（委員長）

難しいんじゃないですか。

（事務局）

正直、厳しいとは思ってます。

（委員）

これ、納期を12月末とかにずらすことってできますか。

（事務局）

10月末に設定した経緯としましては出来たら夏ぐらいにつくりたいなというところが本音として始まって、ただそれだとちょっと、夏は厳しいなというところで、年年末ぐらいしようかなとも考えたんですけど、年末まで行くとちょっと遅いかなというとこでちょっと間とったというところが正直なところです。

20周年を迎えるところというところで、これをどう使うかっていうところもよると思います。1番最初にイメージを描いたのは、20周年のお迎えを節目のときに、何かしらの式典とかあるんじゃないかというところで、やるかやらんかはまだ決まってはないんですけれど、そういったところで何か使えたらいいなっていうのが頭にまずありました。ていうところで、最初夏かなと思ってっていう流れがあっての、設定は、してはおるんですけども、そういったところで、そういった式典等がなければ末で、問題は生じないと思います。

（委員）

確かに、前のやつは合併式典に合わせようとして、1か月遅れてる感じですね。ただ、早めに設定して悪いことはないですよね。

（事務局）

今の段階としてはこのスケジュールで進んでいって、進んでいく中で、これは難しいなというところであれば、そういった変更も視野に入れつつ、柔軟に対応していったらなとは思いますけども、基本としましては、現在のこの10月末というところで、進めていくっていうところだと考えております。

取りあえずはその方向で、形でいかせていただきたいと思います。

（委員長）

変更もありうるっていうことで、考えといていいですかね。

（事務局）

変更ありきっていうわけではないですけどもはい、目指した結果、そういう可能性としてはあるのかなということにさせておいてください。

（委員）

編さん委員会は今後どのような形で関わっていくんですか。

（事務局）

次回につきましては、今回いただいた構成案とかも、いただいた意見とかを踏まえた上でいろいろと打合せとかさせていただくのでそういったところで、そういったところで、また修正案が出てくると思います。そういったところでまた開かせていただきたいなというところと、あとは、それぞれ、執筆等開始していく中で、その中で、その執筆が出てくるタイミングとか、そういったところで、いろいろチェックになるのかなと、基本的には思ってます。あとはいろいろ御意見を伺いたい案件とか出てまいりましたら、適宜開いていきたいなと思います。

（委員長）

それでは、スケジュールについては、この通りに進めさせていただきたいと思います。

３　その他

（委員長）

続いて、四番目、その他、ご意見ありますか。

（一同）

ありません。

（委員長）

それでは、ご意見無いようですので、以上を持ちまして、本日の委員会を終了させていただきます。最後に事務局よりお願いいたします。

（事務局）

はい。皆さんどうもありがとうございました。今後とも、皆様のお知恵、御意見を伺いながら、よりよい町誌を目指して、事務局も頑張ってまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。次回の開催につきましてはまた決まりましたら、御連絡させていただきますのでよろしくお願いいたします。では、本日もどうもありがとうございました。